

第4回 考古天文学会議(文献班報告)
『和名類聚抄』にみる日本古代の天文観

2021年12月20日(月)

吉野ヶ里歴史公園管理センター多目的ホール
専修大学文学部 田中禎昭

はじめに

- * 源順が編纂した古辞書『和名類聚抄』(以下、『和名抄』)にみる天文分類(景宿類)
 - ・ 承平年間(931年～938年)成立 ※体系的に検討した研究はほとんどない
 - ☞ 中国の星宿(二十八宿)と異なる固有の天文分類
 - ⇒ 『和名抄』の天文観の背景にある思想とその起源を読み解く
- * 勝俣隆説:『古事記』『日本書紀』(以下、記紀)神話の神々を星座に当てはめる試み(勝俣 2000)
- * 保立道久説:火山神タカミムスヒの「天地鎔造」のなかで月神と日神が成立(顕宗紀)
⇒ 火山神話に包摂された天体(月・日)観(保立 2012・2018・2019)
- * 細井浩志説:勝俣説の批判と継承(細井 2008)
 - ・ 中国で成立し、日本に輸入された天文思想は倭国の在来思想や、地域の自然・社会条件の影響を受けて変容 ⇒ 天文思想輸入以前の日本(倭国)の天体観を検討
 - ・ 日本には体系的な天体信仰は、神話からは確認できない
 - ・ 北部九州など外洋航海が必要な地域、渡来人の集住地:個別的に星辰信仰が発達
 - ・ 三世紀以後、中国暦を継受、七世紀に自前の暦を作成して国家占星術が定着。しかし中国暦法の習得による暦の作成で、本格的な天体観察は行われず
 - ・ 八世紀以後、陰陽寮に中国由来の天文道・暦道の母体が成立
⇒ 仏教的宇宙観(とくに密教)の導入と習合し、天文観察の行われた地域で天文思想が発達した可能性
- * 渡来人の集住地における天文思想の具体相と、それが王権・国家に影響を及ぼした可能性を論じる
 - ☞ 記紀神話とも、陰陽寮に受容された二十八宿思想とも異なる、国家支配層に浸透したもう一つの日本固有の天文観⇒『和名抄』の景宿体系に反映した可能性
 - ☞ とくに日本古代における七夕信仰にみられる天文観の普及した地域と起源に焦点

I 『和名類聚抄』に見える古代日本の天体観—「景宿」思想

一 『和名類聚抄』景宿類の構成

- ① 日:太陽
- ② 陽鳥:日(太陽)の中にある三足鳥・八咫鳥(ヤタガラス)
- ③ 月・弦月・望月:月

④暈：日・月のまわりに見える輪のような光（日輪・月輪）。かさ。

⇒天文現象

⑤蝕：日食・月食⇒天文現象

⑥星

⑦明星：歳星：木星のこと。アカボシ

⑧長庚：太白星（金星）・和名ユフツツ（夕星）

⑨牽牛：何鼓。和名ヒコボシ（彦星）。別名イヌカヒホシ（犬飼星）

⑩織女：和名タナバタツメ（棚機津女）

⑪流星：和名ヨバヒボシ

⑫彗星：和名ハハキボシ（箒星）

⑬昴星：六星。火神。和名スバル

⑭天河：天漢。河漢銀河。和名アマノガワ

☞天文現象と「星」を除く景宿の構成：日、陽鳥、月、明星、長庚（太白星）、牽牛、織女、流星、彗星、昴星、天河

⇒『万葉集』七夕歌、『懷風藻』に見える七夕の天体観と通底する日本古代の天文観

二 景宿と星宿—古代中国の天文観

*星宿思想の概要（大崎正次 1987、中村士 2018）

- ・星宿とは？：二十八宿とも。天の赤道（地球の赤道を地球中心から天球に投影した円）と黄道（太陽の天球上の通り道）に沿って設けられた 28 個の星座
- ・宿：月が宿る 28 個の星の場所
- ・月が星々の間を 1 周する平均周期 = 27.33 日 ⇒ 二十八宿
- ・『大唐開元占経』（718～726年 瞿曇悉達撰）に見る星宿

☞『和名類聚抄』にみえる「景宿」は古代中国の「星宿」（二十八宿）と異なる

東方七宿				北方七宿				西方七宿				南方七宿			
星座名	星	備考	四神	星座名	星	備考	四神	星座名	星	備考	四神	星座名	星	備考	四神
角	2		青龍	南斗	6		玄武	奎	16		白虎	東井	8		朱雀
亢	4		青龍	牽牛	6		玄武	婁	3		白虎	鉞	1	井宿に附属	朱雀
氏	4		青龍	須女	4	織女	玄武	胃	3		白虎	輿鬼	5		朱雀
房	4		青龍	虚	2		玄武	昴	7		白虎	柳	8		朱雀
鈎鈴	2	房宿に附属	青龍	危	3		玄武	畢	8		白虎	七星	7		朱雀
心	3		青龍	墳墓	4	危宿に附属	玄武	附耳	1	畢宿に附属	白虎	張	6		朱雀
尾	9		青龍	營室	2		玄武	觜	3		白虎	翼	22		朱雀
神宮	1	尾宿に附属	青龍	離宮	6	營室に附属	玄武	參	10		白虎	軫	4		朱雀
箕	4		青龍	東壁	2		玄武	伐	3	參宿に附属	白虎	長沙	1	軫宿に附属	朱雀
												轄	2	軫宿に附属	朱雀

*景宿とは何か？

- ・中国における景宿の辞書的解釈：列星（『漢典』）⇒星宿と同義か？
- ・『旧唐書』卷二十二・礼儀志二（明堂）

天に二十八宿有り、故に二十八柱有り。所以、仰げば則ち乾圖なり。上に景宿を

符し、編珠を考へて度を紀し、列宿を觀て以て時を迎ふ。

- ・唐の礼制実現のために建てられた明堂の建築仕様の解説：星宿思想に基づく

⇒明堂中心にある二十八本の柱＝二十八宿

⇒乾図＝天図（乾坤＝天地）上に描かれた星宿を景宿と呼ぶ

- ・『芸文類聚』卷一・天部上

尚書<考靈曜>に曰く、五星、編珠のごとく、旋璣（北斗七星）中の星々、調べば、風雨を則す。 cf. 『尚書緯』：後漢に編纂された緯書

*編珠＝五星、列宿＝二十八宿（『旧唐書』）を指すと考えられる

- ・中国で古代から知られている五惑星

歳星（木星）・熒惑（けいこく）（火星）・鎮星（土星）・太白（たいはく）（金星）

・辰星（しんせい）（水星）の総称。五緯。五行と対応

*『和名抄』景宿と五星の対応

- ・明星（歳星）・長庚（太白星）のみで掲載、熒惑（火）・鎮星（土）・辰星（水）はなし ⇒明星・長庚も、別名として歳星・太白星を載せるのみ

- ・熒惑（火）の代わりに、「火神」として「昴」を入れる

☞中国の星宿から部分的に取り入れるが、星宿体系（五星二十八宿）とは異なる日本固有の天文観が反映

II 『万葉集』七夕伝説歌の検討

A 天の河の表現 ※歌番号は『国歌大観』による

①天漢・漢：1518, 1519, 1522, 1524, 1764, 1765, 1996, 2011, 2013, 2015, 2020, 2029, 2038, 2042, 2043, 2044, 2045, 2047, 2063, 2068, 2089, 3656, 4313

②天河・天川：1522, 2030, 2055, 2059, 2061, 2071

③アマノガワ（万葉仮名）：3658, 4308, 4310

④天漢原（天之漢原）・天河原（天之河原）：1520, 1527, 1528, 1997, 2003, 2092, 2093

⑤天漢安川原・天漢安之川原・天漢安渡：2033, 2089, 2000

B 天の河の風景・施設に関する表現

①天河浮津・天河津・河津・津：1529, 2004, 2019, 2070, 2091

②八十舟津：2046

③河瀬・上瀬・下瀬・八十瀬・渡瀬・渡湍・瀬：1545, 1764, 2018, 2053, 2067, 2069, 2074, 2076, 2083, 2084, 2085, 2091, 4163

④渡：2000, 2018, 2055, 2067, 2072, 2074, 2077, 2078, 2089

⑤道（河道）：1546, 2001, 2010

⑥船・舟・フネ（万葉仮名）：1519, 1520, 1527, 1529, 1764, 1765, 1996, 1998, 2000, 2015, 2067, 2070, 2072, 2075, 2077, 2082, 2086, 2087, 2088, 2089, 2091, 2056, 2058, 4313

⑦橋（玉橋・棚橋・打橋）：1764, 2018, 2056

⑧河門（八十）：2048, 2049, 2082

C 神々の登場する場

①「天の河原」の位置づけ

- ・ 1520 番歌：織女がいる場所。牽牛の船が「天の河」を渡ってきた後の逢瀬の場
- ・ 1527 番歌：牽牛の船の対岸で霧が立つ「天の河原」
- ・ 2003 番歌：(河原の)「石枕」で夫婦の関係を結ぶ
- ・ 2089 番歌：牽牛が「通ふ」場としての「天漢安の川原」

⇒「天の河原」=「安の河原」は、織女がいる場であり、牽牛が通う場

※天の河と記紀神話にみえる天の安河が習合／日本古代の「妻訪婚」を反映

②「月」と「夕星」と「天の河」

* 2010 番歌

夕星も通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人壮士

- ・ 夕星 (ゆふづつ)：太白星 (長庚) = 「暮れに西方に見える星」(『和名類聚抄』)
金星のこと。宵の明星 = 日没後の空に現れる金星を指す。
「明星 (あかぼし)」と対の概念。

- ・ 月：日本・中国ともに七夕の景物 (小島憲之 1953)

cf. 「月船」「月鏡」「夕月」(『懐風藻』)

- ・ 月を使者とみる説 (渡瀬昌忠 a1993、同 b 1993)

⇒「月、天之使也」(『淮南子』)

⇒月を二十八宿を往来する使者とみる観念から

☞「夕星」も往来する天道をいつまで仰ぎ見ていけばよいのか、と二十八宿を往来する媒 (使者) の月 = 「月人壮士」に呼びかけている

* 2043 番歌

秋風の清きゆふべに天の河舟漕ぎ渡る月人壮士

* 2051 番歌

天の原行きてを射むと白真弓ひきて隠せる月人壮士

⇒牽牛に対する月 (月人壮士) の嫉妬を詠った歌とする説がある

* 2093 番歌

妹に逢ふ時片待つとひさかたの天の河原に月ぞ経にける

⇒織女に逢う時を待っている長い期間に天の河原には月が宿っている

☞ 2051 番歌との対比：牽牛と月との関係

* 3611 番歌

大船に真楫繁貫き海原を漕ぎ出て渡る月人壮士

☞天の河、牽牛 (彦星)、織女、夕星、月 (月人壮士) で構成される日本古代の天文観 ⇒『和名抄』に景宿として認識 (陰陽寮官人が司る星宿とは異なる)

☞日本古代の景宿観の起源は何か? ⇒西王母思想との関係で考察

III 日本古代における七夕伝承の起源と伝承—西王母思想と漢氏

一 古代中国における西王母と七夕 (小南一郎 1991)

* 古代中国における西王母の変遷

①殷・卜辞：天神「西母」

②周～漢：『山海経』西山経⇒西方の崑崙山にいる女神

- ・豹の尾、虎の歯を持つ
- ・蓬髮／「勝」という髪飾りを頭に載せる
- ・疫厲（疫病）を司る神
- ・陰陽両性を具有する神

③後漢末～三国時代

- ・西方を司る月・女性神＝西王母／東方を司る太陽・男性神＝東王父と対比

⇒③段階の西王母伝承：『博物誌』（西晋・張華）・『漢武帝故事』⇒道教思想

七月七日の夜、紫雲の雲に乗り、頭に七つの「勝」を載せた西王母が漢の武帝の御殿に到着し、携えてきた三千年に一度実を結ぶ桃の実七個の内、五個を武帝に与える⇒皇帝の長寿を護る西王母という観念

* 西王母が頭に載せる「勝」＝縦糸を巻き付ける織機の横木⇒機織の神

* 『荊楚歲時記』（梁時代）：中国における七月七日「乞巧奠」

- ・女性が裁縫の上達を願い月に向かって七本の針に糸を通す行事
- ⇒日本に伝来し、八世紀に宮廷儀礼として行われる

* 青鳥と西王母・陽鳥と東方朔（東王父）

- ・『和名抄』の陽鳥：「日」（太陽）の中にある三足の赤い鳥（朱鳥）
- ・西王母（月神）に食事を運ぶ「三青鳥」（『山海経』）
- ・東方朔：朱鳥（陽鳥）を従える日神（『博物誌』）

⇒陽鳥を入れた『和名抄』の景宿は、二十八宿の天文観とは異なるもの

⇒西王母（月）・東方朔（日）に関わる魏晋南北朝期の道教思想を継受した可能性

二 日本古代の七夕伝承と西王母

* 『懷風藻』五二・藤原総前（房前）の七夕詩（五言）

五言。七夕。

帝里初涼に至り、神衿千秋を翫ぶ。瓊筵雅藻を振り、金閣良遊を啓く。鳳駕雲路に飛び、龍車漢流を越ゆ。神仙の会を知らんと欲して、青鳥瓊楼に入る。

（天皇の都には初めて秋風が吹いて、天皇はこの千秋万歳の秋を楽しまれる。玉の筵では雅やかな詩文があちこちから詠みあげられ、美しい楼閣では七夕の遊びが催される。織女の乗る車は雲の通り路を飛び行き、龍の車は天の河を越える。牽牛・織女の神仙の出会いを見ようとして、西王母の使者である青鳥は二星の留まる玉の楼閣に飛び入ることだ）

⇒天皇御前の七夕の詩宴で、西王母—青鳥と結びついた西王母思想が八世紀初頭の貴族層に共有

⇒八世紀の貴族層の七夕思想は、いつ、いかなる経路で日本に伝来・定着したのか？

⇒日本古代における西王母・東王父思想の継受との関わりで探究

三 日本古代の地域社会にみえる西王母／東王父信仰

- * A 宝亀十年（779）坂上忌寸石楯供養経跋文（唐招提寺所蔵）
 - ・増尾伸一郎の新研究（増尾 2017）
 - ・坂上忌寸石楯の追善供養のため、その妻・紀朝臣多継と子・氏成と秋穂の三名が発願・書写
 - ⇒唐招提寺所蔵跋文は一部、欠損。諸写本により校訂
 - ☞広島県三原市八幡宮内・御調神社に模刻版木が現存⇒全容が解明
 - ・文中に「方欲西母長寿、晋於親東父還乎」（まさに西母の長寿をねがい、親しき東父の還るを晋（すす）めん）の文言が見える（増尾 2017）
 - ☞西母＝西王母と東父＝東王父の観念が八世紀の地域社会に定着していた事実
 - ⇒西王母・東王父思想の継受過程を明らかにする一級の一字史料といえる
 - ☞坂上忌寸氏とは？
 - ・応神朝に渡来した伝承をもつ東漢氏の一枝族（『坂上系図』、『新撰姓氏録』等）
 - ・東漢坂上直（欽明紀三十一年〈570〉条）⇒坂上直⇒坂上連（天武紀十一年〈682〉条）⇒坂上忌寸（天武紀十四年条）と姓を改める
- * B 『延喜式』 卷八・大祓祓詞
 - ・6月・12月の晦日に天皇の長寿を祈る大祓の儀式の中で、東西文部が読む大祓の呪言の中に「左・東王父、右・西王母」がみえる
 - ・東西文部⇒東漢氏・西文氏を指す（大和・河内を拠点とした渡来系氏族）
- * 西王母・東王父思想の2つの史料⇒東西漢氏によって将来・伝承された可能性
 - ☞では、漢氏と七夕伝承の接点は？

四 記紀・「夷振（夷曲）」（ひなぶり）にみる「オトタナバタ」の検討

- * アメワカヒコの葬礼に参列したアジシ（ス）キタカヒコネについて、その妹・下照媛（記では高比売命）が歌った歌謡として記録
- * 『古事記』 上巻（アメワカヒコ神話）

天(あま)なるや オトタナバタの 頸(うな)がせる 玉の御統(みすまる) 御統(みすまる)に 穴玉(あなだま)はや み谷(たに) 二(ふた)わたらす アジシキタカヒコネの神ぞ (天にいる オトタナバタが 首にかけていらっしやる 玉を貫き続べた緒よ 緒に貫き続べた穴玉よ ああ 谷の 二つにわたって照り輝いていらっしやるのは アジシキタカヒコネの神だ)

とうたひき。此の歌は夷振なり。
- * 『日本書紀』 神代下第九段一書第一（アメワカヒコ神話）

天(あま)なるや オトタナバタの 頸(うな)がせる 玉の御統(みすまる) 穴玉(あなだま)はや み谷(たに) 二(ふた)わたらす アジスキタカヒコネ

又、歌して曰はく、

天離る 夷つ女の い渡らす迫門(せと) 石川片淵 片淵に 網張り渡し 目ろ寄しに 寄し来ね 石川片淵 (夷つ女が 瀬戸を渡って (魚をとる) 石川の淵よ その淵に 網を張りわたし 網の目を引き寄せるように 寄っておいで。石川の片淵よ)

此の両首歌辞は、今、**夷曲**と號く。

* オトタナバタの原表記：「淤登多那婆多」(記) / 「乙登多奈婆多」(紀)

* 七夕との関係を否定する説

- ・折口信夫説：神聖な水辺に置いた棚(ユカワタナ)の上で聖なる女性が機織りしながら寄り来る神を迎える習俗が背景(折口 1965)
- ・遠藤宏説：「オト(弟)タナバタ」は「エ(兄)タナバタ」の存在が想定され、織女とは無関係(遠藤 1993)

* 七夕との関係を肯定する説

- ・平林章仁説：「オト」は「エ」に対する語ではなく、かわいい・美しい意味の接頭語(「弟日姫子」(『播磨国風土記』松浦郡条)の事例など)⇒遠藤説を否定
- ・古事記歌謡に詠み込まれた「石川片淵」=河内国石川(古市・野中)周辺に伝わる歌垣で詠われた歌謡が基⇒河内国石川における七夕の織女(棚機津女)伝承と重ね合わせた歌垣歌謡が、記紀編纂段階でアメワカヒコ神話に取り入れられたもの(平林 1994・1998)

☞平林説の視点を支持。しかしなぜ、歌垣歌謡がアメワカヒコ神話に組み込まれたのか、その理由の説明が十分ではない

☞記紀歌謡：記紀伝承・神話と起源を異にする(土橋寛 1965)⇒八世紀に歌謡が伝習された祭祀・儀礼・場の理解を起点に解釈すべき

⇒「夷振(曲)」の理解が必要

* 「夷振(曲)」とは何か？ 奈良時代の雅楽寮に伝習された雅楽曲と考えられる

- ・中国の楽府の命名法によって名付けたもの(『岩波日本古典文学大系 日本書紀』頭註) / 歌曲の名称で、田舎風の歌曲の意味(『岩波日本古典文学体系 古事記』頭註) ⇒実態はよくわかっていない

* 『古事記』下卷(允恭天皇)にみえる「夷振」

王(おおきみ)を 島にはふらば(波夫良婆) 船余り い帰り来むぞ 我が暈ゆめ
言をこそ 暈と言はめ 我が妻はゆめ (王を島に葬ったならば 船が余れば
帰ってこよう (だから) 私の暈は穢れのないよう忌み慎んでおくれ 言葉に出して
暈と言おうが 我が妻は忌み慎んで清らかにしておくれ)

此の歌は**夷振**の片下ろしなり。

- ・允恭天皇崩御後、次の大王が決まる前(殯の期間)に、伊予に流された木梨軽王子が歌った歌謡として収録

⇒本来は、王の「葬り(はふり)」に伴って歌われた祓えの歌謡=「夷振」

⇒アメワカヒコ神話にみえる「夷振(曲)」も、アメワカヒコの葬礼の場面に挿入

☞「夷振(曲)」：王の葬礼にたずさわる集団の歌謡？

* 『令集解』喪葬令 8 親王一品条(親王以下の葬送関連規定)にみえる鼓吹と「遊部」

- ・親王と大臣・大納言の葬礼に朝廷が葬具・鼓吹楽器・遊部を支給することを規定
- ・「遊部」：生者に災禍を及ぼす恐れのある使者の靈魂を鎮め、速やかに冥界に向かわせるための呪儀を喪葬の場で執り行う人々(新井喜久夫 1962、秋間俊夫 1985)
- ・古記(大宝令注釈書)

古記に云はく、遊部は**大倭国高市郡**に在り。生目(垂仁)天皇の苗裔なり。(略)

但し、此の条の遊部、謂ふところ、野中・古市の人の歌垣の類、是なり。

⇒河内国野中・古市＝河内国石川を指し、そこで伝習された「歌垣」の歌謡が王宮の喪葬に奉仕する遊部によって歌われていた事実を示す

☞アメワカヒコの喪葬で歌われたとする歌謡＝「石川片淵」（河内国石川）出自の王の葬礼に供奉する遊部によって歌われた歌垣歌謡＝「夷振（曲）」

☞なぜ、遊部の歌垣歌謡＝「夷振（曲）」の中に「オトタナバタ」が見えるのか？

⇒遊部の居地＝大倭国高市郡と河内国野中・古市⇒東西漢氏の本拠地

*大倭国高市郡＝東漢氏の本居（加藤謙吉 1991）

・『続日本紀』宝亀三年（772）四月・坂上忌寸苜田麻呂の奏上

凡そ高市郡内は、檜前忌寸及十七県の人夫、地に満ちて居り。他姓者は十に一・二なり

☞西王母信仰をもつ坂上忌寸氏（東漢氏）の本居・高市郡＝「遊部」の拠点

*河内国の「遊部」の居地＝野中・古市の歌垣関連史料

・『続日本紀』神護景雲四年（770）三月辛卯（二十八日）条

葛井・船・津・文・武生・蔵六氏の男女二百三十人、歌垣に供奉す。其の服は並びに青摺の細衣を著し、紅の長紐を垂る。男女相並び、行を分けて徐に進む。歌ひて曰く、「ヲトメらに ヲトコ立ちそひ 踏みならず 西の都は 万世の宮」といふ。其の歌垣に歌ひて曰く、「淵も瀬も 清くさやけし 博多川 千歳を待ちて 澄める川かも」といふ。歌の曲折ごとに、袂を挙げて節を為す。その余の四首は並に是れ古詩なり。

・称徳女帝の由義宮（河内国）で供奉した近隣の渡来系 6 氏の歌垣の記述

・武生氏・蔵氏⇒河内国古市郡を本居とする西文氏の同族（王仁の子孫を称する）
古市郡に西文氏の氏寺・西琳寺（七世紀創建）が所在

・葛井氏・船氏・津氏⇒野中郷・野中寺（七世紀創建）の所在する河内国丹比郡を本居／王辰爾の後裔を称す

☞王仁・王辰爾の後裔を称する氏族⇒野中・古市を拠点に同族的に結合（井上光貞 1982・平林 1994）

☞西王母信仰をもつ西文氏（『延喜式』大祓詞）関連氏族の本居・河内国野中・古市＝歌垣の伝承地＝「遊部」の拠点

*小活

・「オトタナバタ」を歌句に含むアメワカヒコ神話に挿入された「夷振（曲）」は、東西漢氏が伝承した「遊部」の歌垣歌謡の一曲と考えられる

・東西漢氏：西王母／東王父信仰を護持していたこと

・乞巧奠・七夕の宴：西王母信仰と結びついていること

☞「オトタナバタ」＝「弟織女」説は妥当⇒東漢氏・西文氏により西王母／東王父信仰と結合した道教の神仙として伝来・伝承したものではないか？

*課題一「夷振（曲）」にアジシ（ス）キタカヒコネが見えるのはなぜか？

・アジスキタカヒコネの性格：菊地照夫説（菊地 2016）

α 大和国葛城の地霊神⇒王権直轄領である葛城屯田（かつらぎのみた）＝王権新嘗用斎田の祭儀で祭られる神

- cf. 延喜式内社：葛上（葛城上の意）郡に高鴨阿治須岐託彦根命神社の祭神
 β「迦毛大御神と謂う」（古事記）⇒記で「大御神」は皇祖神イザナギ・アマテ
 ラスとアジスキタカヒコネのみ ⇒王権祭祀のなかでもっとも格式の高い三神
 γ「皇孫命の近き守り神」（出雲国造神賀詞）
- ☞アメワカヒコ神話：私見も菊地説を支持
- ・ただし歌謡は記紀神話に後から挿入された部分で、本来、別起源⇒歌謡を神話に
 合わせて解釈してはならない
 - ・漢氏の伝承する歌垣歌謡＝「夷振（曲）」のなかでアジシ（ス）キタカヒコネが
 歌われる ⇒後にアメワカヒコ神話に付会
 - ・「天離る夷つ女」＝「オトタナバタ」＝「石川片淵」近隣に居住する神女
 ⇒川を越えて「寄る」（通う）男神＝アジスキタカヒコネは他地域の神
- ☞祓の祭儀により生王の身体守護を担う漢氏の「夷振（曲）」：「皇孫の近きを
 守る大神」としてのアジスキタカヒコネを招く神招ぎの歌ではないか？

むすびにかえて

- *月人壮士（『万葉集』）：月の人である壮士⇒月神・西王母の下にある使者か？
- *夕星（長庚）（『万葉集』）：西方に輝く宵の明星（『和名抄』）
- *青鳥（『懐風藻』）：西王母の使者（東王父の陽鳥と対比）
 - ☞日本古代の七夕が伝える天文観一月・夕星（長庚）・青鳥—は、西方（崑崙山）に
 いる西王母が司るという宇宙観が背景
 - ☞『和名抄』の景宿体系：西王母（月）・東方朔（日）に関わる魏晋南北朝期の道教思
 想を継受して形成
- *西王母・東王父思想を土台にした天文観（七夕を含む）は、漢氏によって伝来・流布
 し、漢氏の奉仕を通して天皇・貴族層に普及した可能性⇒『和名抄』に記載
 cf.「月神」（月読神）：山背国葛野郡の葛野坐月読神社（式内社）と月神を祭る葛野
 郡に置かれた新嘗の斎田「歌荒櫟田」（顕宗紀）
 ⇒記紀の「月」（月読神）：葛野郡を本居とする渡来系氏族・秦氏が関与（菊地 2016）
- *日本古代の七夕・西王母／東王父思想の源流はどこか？
 - ・漢氏：倭国と親しい安羅を中心とした南部加耶諸国から渡来⇒百濟系渡来人を統括
 （加藤謙吉 1991）
- *朝鮮半島の七夕信仰と『和名抄』景宿類にみえる牽牛（別名・イヌカイボシ）の関係
 - ・高句麗・徳興里古墳（5世紀初・北朝鮮／平安南道所在）の七夕画像壁画
 - α 織女の図像：西王母像との対比
 - 永平十二年（69年）楽浪郡王盱墓出土漆盤に見える西王母像との比較
 - ・頭上に「勝」か？ 西王母との習合の可能性
 - ・織女上の神獣⇒西王母に仕える「竜虎」の可能性
 - β 犬の画像：中国の七夕壁画には見えない図像 ⇒『和名抄』牽牛（イヌカイボシ）
 - ☞高句麗・中国の七夕壁画の図像分析は課題

[参考文献]

- 秋間俊夫『『死者の歌』』（『日本文学研究資料叢書 古代歌謡』有精堂出版、1985年）
- 新井喜久夫「遊部考」（『続日本紀研究』9-9、1962年）
- 井上光貞『日本古代思想史の研究』（岩波書店、1982年）
- 遠藤 宏「七夕伝説」（『上代説話事典』雄山閣、1993年）
- 大崎正次『中国の星座の歴史』（雄山閣、1987）
- 折口信夫「水の女」（『折口信夫全集』二、中央公論社、1965年）
- 加藤謙吉『大和政権と古代氏族』（吉川弘文館、1991年）
- 勝俣 隆『星座で読み解く日本神話』（大修館書店、2000年）
- 菊地照夫『古代王権の宗教的世界観と出雲』（同成社、2016年）
- 共同通信社編・平山郁夫監修『高句麗壁画古墳』（共同通信社、2005年）
- 小島憲之「万葉集七夕歌の世界」（同『上代日本文学と中国文学』中、塙書房、1953年）
- 小南一郎『西王母と七夕伝承』（平凡社、1991年）
- 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』（岩波書店、1965年）
- 中村 士『古代の星空を読み解く キトラ古墳天文図とアジアの星図』（東京大学出版会、2018年）
- 平林章仁『七夕と相撲の古代史』（白水社、1998年）
- 平林章仁『橋と遊びの文化史』（白水社、1994年）
- 細井浩志「中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書—天体信仰と暦—」（『桃山学院大学総合研究所紀要』34-2、2008年）
- 保立道久『歴史のなかの大地動乱 奈良・平安の地震と天皇』（岩波新書、2012年）
- 保立道久『現代語訳 老子』（ちくま新書、2018年）
- 保立道久“火山神としてのタカミムスヒと『莊子』、そして桜島噴火”，保立道久の研究雑記，<http://hotatelog.cocolog-nifty.com/blog/2019/01/post-7a91.html>（参照 2021-12-01）
- 増尾伸一郎『道教と中國撰述佛典』（汲古書院、2017年）
- 渡瀬昌忠 a「人麻呂歌集と漢文学—七夕歌の月の使者—」（『和漢比較文学叢書九 万葉集と漢文学』汲古書院、1993年）
- 渡瀬昌忠 b「人麻呂歌集七夕歌群の月人壮士」（『青木生子博士頌寿記念論集 上代文学の諸相』塙書房、1993年）

七夕の歴史の辞書的解説（『国史大辞典』吉川弘文館）

たなばた 七夕 七月七日に行われる星祭の行事。「しちせき」とも訓む。「七月七日、為牽牛・織女聚会之夜」（『荆楚歲時記』）とあるように、古代中国では牽牛は Aquila（鷲座）

の Altair、織女は Lyra（琴座）の Vega をいい、この両星を擬人化し、一年に一度七月七日の夜天の川を渡って逢瀬を楽しむとされた。この伝説と乞巧奠（きこうてん）の行事が中国から輸入され、わが国古代の棚機女（たなばたつめ）に関する信仰と習合されたとみられる。棚機女とは棚の機中にある女の意で、村の神女の中から選り出されて神の嫁となる処女が、棚作りの建物に住んで神の訪れを待ち、来るべき神のために機を構えて布を織るといふ。これを棚機女・弟棚機（おとたなばた）といった（折口信夫）。「たなばた」は『源氏物語』ではすべて棚機つ女・棚機姫、つまり織女星の意に使われている。七月七日は令（りょう）に定めた節日の一つで、古来の神祭の日として天皇相撲御覧と文人による七夕の賦詩の宴が行われたが、平安時代になり平城天皇の国忌により相撲の儀は変更され行事は分化し、星合・乞巧奠が盛んになった。古代中国

では七は陽数であり、その重なる日に意義を認めた。牽牛星はもと農業生活を主とした上代漢民族の間で重視された。中国古典では天の川を渡るのに橋を用いるが、わが国の和歌では船とすることが多く、それも川というよりも海を渡るような意識が強いのは、天上を海と観ずる習慣からとみられる。また中国では織女が牽牛のもとを訪れる（父系家族制）のに対し、わが国では牽牛が織女のもとに通う（妻問婚）という形をとり、大陸文化の国風化がみられる。『万葉集』には二星会合の歌が多い。藤原教通は長和四年（一〇一五）七月七日の夜二星の会合を見たとしてその様子を藤原道長に語り、道長は「近代未聞事也、感懐不_レ少」（『御堂関白記』）と記している。十六光年に二十六光年と遠く離れた星々が一夜のうち動いて川を渡ることはありえないが、瞬き交わす清澄な光に浪漫的な天上への憧憬を見出したのであろう。銀河系宇宙である千億

個の星の集団を横に見通した天の川や、二星が会するとき鵲（かささぎ）が翼を並べて天の川に渡すという想像上の「鵲の橋」も和歌に登場する。南北朝時代のころから七遊といひ、

七百首の詩歌、七調子の管絃、七十韻の連句・連歌、七百の毬、七献の酒など、七の数に掛けた各種の遊びも行われた。江戸幕府では諸大名が七夕の祝儀として使者をもって鯖代を献上する。江戸時代には五節供の一つとして広く一般にも行われ、和歌や願い事を書いた五色の短冊・色紙、切紙細工を笹竹につけて家ごとに掲げる楽しい祭となった。また、この日邪気を払うために素餅（さくべい）・冷素麵を食べることも行われた。なお遊里では七夕の故事から、きわめてまれにしか来ない客のことを七夕客といった。 ↓乞巧奠（きこうてん）

【参考文献】『古事類苑』歳時部、山中裕『平安朝の年中行事』（『塙選書』七五）、折口信夫「七夕祭りの話」（『折口信夫全集』一五所収）、同「たなばた供養」（同所収）、中西進「七夕」（山中裕・今井源衛編『年中行事の文芸学』所収）（中村 義雄）

『日本書紀』神代下 一書第一

味耜高彥根神、光儀華艷しくして、二丘二谷の間に映る。故、喪に會へる者歌して曰はく、或いは云はく、味耜高彥根神の妹下照媛、衆人をして丘谷に映く者は、是味耜高彥根神なりといふことを知らしめむと欲ふ。故、歌して曰はく、

天なるや 弟織女の 頸がせる 玉の御統の 穴玉はや み谷 二渡らす 味耜高彥根

又歌して曰はく、

天離る 夷つ女の い渡らす迫門 石川片淵 片淵に 網張り渡し 目ろ寄しに 寄し寄り來ね 石川片淵 此の兩首歌辭は、今夷曲と號く。

『古事記』上卷 (天若日子)

故、天若日子の妻、下照比賣の哭く聲、風の與響きて天に到りき。是に天在る天若日子の父、天津國玉神及其の妻子聞きて、降り來て哭き悲しみて、乃ち其處に喪屋を作りて、河鴈を岐佐理持は首を以る三三と爲、鸞を掃持と爲、翠鳥を御食人と爲、雀を確女と爲、雉を哭女と爲、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びき。

此の時、阿遲志貴高日子根神は首を以る四字、到て、天若日子の喪を弔ひたまふ時に、天より降り到つる天若日子の父、亦其の妻、皆哭きて云ひしく、「我が子は死なずて有り祈理。此の二字は首を以る。我が君は死なずて坐し祈理。」と云ひて、手足に取懸りて哭き悲しみき。其の過ちし所以は、此の二柱の神の容姿、甚能く相似たり。故是を以ちて過ちき。是に阿遲志貴高日子根神、大く怒りて曰ひしく、「我は愛しき友なれこそ弔ひ來つれ。何とかも吾を穢き死人に比ぶる。」と云ひ

て、御佩せる十握劍を抜きて、其の喪屋を切り伏せ、足以ちて蹶ち離ち遣りき。此は美濃國の藍見河の河上の喪山ぞ。其の持ちて切れる大刀の名は、大量と謂ひ、亦の名は神度劍を以る音と謂ふ。故、阿治志貴高日子根神は、怒りて飛び去りし時、其の伊呂妹、高比賣命、其の御名を顯さむと思ひき。故、歌ひしく、天なるや 弟棚機の 項がせる 玉の御統 御統に 穴玉はや み谷 二渡らす 阿治志貴高 日子根の神ぞ。 とうたひき。此の歌は夷振なり。

『山海經』西山經

又西三百五十里、曰玉山、是西王母所居也、西王母、其状如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝、是司天之厲及五

『山海經』大荒西經

西海之南、流沙之濱、赤水之後、黑水之前、有大山、名曰崑崙之丘……其下有弱水之淵環之、其外有炎火之山、投物輒然、有人戴勝、虎齒有豹尾、穴處、名曰西王母、此山万物尽有

『山海經』海內北經

西王母梯几而戴勝杖、其南有三青鳥、為西王母取食、在崑崙虛北

『和名類聚抄』卷一

倭名類聚鈔卷第一 源順撰

天部第一 地部第二 水部第三

景宿類第一 雲雨類第二

風雪類第三

景宿類第一 天河附出

日 造天地經云佛令寶應菩薩造日 陽鳥 歷天記云日中有三足鳥赤色今 案文選謂之陽鳥日本紀謂之頭

八咫鳥田氏私記云良須加

月 造天地經云佛令吉祥菩薩造月

弦月 劉熙釋名云弦月月之半名也其 形一旁曲一旁直若張弓弦也弦

望月 釋名云望月知都岐月大十六日 小十五日日在東月在西遙相望

暈 郭知玄切韻云暈氣繞日月也音

運此間云日月 辨色立成云

蝕 釋名云日月虧曰蝕音食稍小浸

星 虧如虫食草木葉故字從虫食也 說文云星萬物精上所生也桑經

明星 反和名 兼名苑云歲星一名明星此間云

長庚 兼名苑云太白星一名長庚暮見

牽牛 於西方為長庚此間云 爾雅註云牽牛一名何鼓古保之

織女 兼名苑云織女牽牛疋也 兼名苑云

流星 兼名苑云流星一名奔星 兼名苑云

彗星 兼名苑云彗星其形如帚彗也音

昂星 宿耀經云昂星六星火神也音與

天河 兼名苑云一名天漢今按又名河

漢銀河也乃加八

宝亀十年（779）坂上忌寸石楯供養經跋文（唐招提寺所蔵）

- (1) 夫以般若大乘者、斯乃三世諸佛之肝
- (2) 心、十地菩薩之寶藏、然則皈依者、誰不
- (3) 消災納福、隨順者、豈無斷惑證眞、伏
- (4) 惟、爲孝子坂上忌寸氏成秋穗等、慈
- (5) 先考故出羽介從五位下勳四等坂上
- (6) 忌寸石楯大夫之厚恩、撫育之慈高踰
- (7) 須彌、皈依之慈悲、深過大海、經生累劫、碎
- (8) 身捨命、何得報哉、方欲西母長壽、晉於
- (9) 親東父還乎感已盡、曾參之侍奉、極仰
- (10) 尼之孝養表爲子之至誠、展事親之深
- (11) 禮、豈謂四蛇侵命、二鼠催年、報運既窮
- (12) 奄從去世、孝誠有闕、慈顏无感、泉路轉
- (13) 深窓隔親見、仰天伏地、而雖悲歎、都無
- (14) 一益、空沾領袖、唯有佛法、必救恩虛
- (15) 敬□以維寶龜十年歲次己未潤五月朔
- (16) 癸丑、母紀朝臣多繼并男氏成女
- (17) 秋穗等參人、同志結言、奉寫大般若
- (18) 大乘壹部陸百卷、以爲遠代之法寶也、
- (19) 仰願以此功德先同奉資、先考之神
- (20) 路、般若之船、淨於苦海、速到極樂之寶
- (21) 域、大乘炬□於閻衢、早登摩尼之玉殿
- (22) 永覺三界之夢、長息一如之床、廣及有識、
- (23) 共出迷濱到涅槃岸

〔校異〕

A Ⅱ 『寧樂遺文』（缺文は「古經題跋隨見録」に依據）

B Ⅱ 『日本古寫經現存目錄』（「日本寫經綜鑑」を版印で補訂）

C Ⅱ 『唐招提寺古經選』

D Ⅱ 『寧樂朝寫經』（缺文は「日本寫經綜鑑」に依據）

① D 丈

② A 擁 B 飯 C 歸 ③ A B 劫

④ A 文還乎感 B D 文遂平成 C 文遂乎感

⑤ A 申 ⑥ B D 條

⑦ A C 豈是謂 ⑧ B C 役

⑨ A 然 ⑩ C 孝子 ⑪ A 親 D 頤

⑫ A 終 B 縑 C 縑 D 絲 ⑬ B C D ナシ

⑭ B 靈

⑮ A C 靈敬以 B 敬□以 D 敬□以維

⑯ B D ナシ ⑰ B ナシ D 日

⑱ A 波羅蜜經

⑲ A 先用 B D 光同 C 先同

⑳ A 深 B 浮 ㉑ D 連

㉒ D 城 ㉓ A 換 ㉔ A 閻衢 B C D 閻衢

㉕ A 護

廣島県・御調神社蔵
模刻版拓影



漢武帝好仙道、祭祀名山大沢、以求神仙之道、時西王母遣使、乘白鹿、告帝当来、乃供帳承（九）華殿、以待之、七月七日夜漏七刻、西王母乘紫雲車而至於殿西、南面西向、頭上戴七勝（種）、青氣鬱鬱如雲、有三青鳥、如烏大、夾（使）侍母旁、時設九微燈、帝東面西向、王母索七桃、大如彈丸、以五枚与帝、母食二枚、帝食桃、輒以核著膝前、母曰、取此核、将何為、帝曰、此桃甘美、欲種之、母笑曰、此桃三千年一生実、唯帝与母对坐、其從者皆不得進、時東方朔窃從朱鳥牖中窺母、母顧之、謂帝曰、此窺牖小兒、嘗三来盗吾此桃、帝乃大怪之、由此世人謂方朔神仙也

高句麗・德興里古墳壁画（南側天井）・七夕図

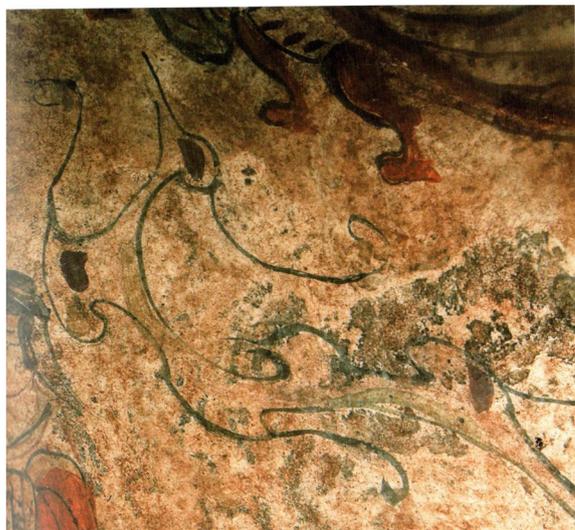


上記拡大図



（共同通信社2005）

德興里古墳（織女図拡大）



德興里古墳壁画（部分）

樂浪郡王盱墓出土漆盤



竜虎図（拡大）



竜虎図

（小南1991）

河内国 古市・野中周辺図



下記の下図を元に加筆

1/20000「古市」(明治41年測図・明治44年2月28日発行)

1/20000「信貴山」(明治41年測図・大正1年10月30日発行)

時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷 謙二)より作成